

観点別学習状況の評価（A～C）の事例とその評価基準

1 学校の実情

生徒は素直であるが、思考することが苦手な生徒が多い。特に、学習に関しては苦手意識が高く、取り組む姿勢になるまでに時間がかかる。また、義務教育段階の知識が不十分である生徒も見られ、知らないことが多い。高校1年次に学び直しの授業を行うが、習得するには範囲が広く時間が足りないため難しい。

2 その観点で行おうとした理由

本研究では、「主体的に学習に取り組む態度」についての評価を行いたいと考える。「主体的に学習に取り組む態度」は、結果ではなく過程を評価するものと考え、授業1時間の中で評価し終えるということとして、生徒が活動する実験の授業で実施した。実験では、「観察できた・できなかった」「成功した・失敗した」「理解できた・できなかった」のように技能や成果が問われる場面やレポートの考察から思考や表現が評価される場面が多いが、ここでは実験に取り組む姿勢から「主体的に学習に取り組む態度」を見取りたいと考える。

3 評価基準 【主体的に学習に取り組む態度】の評価

項目 \ 評価基準	A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
実験を工夫して行おうとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】	自分で考えた方法で実験に取り組むもうとしている。	アドバイスしてもらった方法を用いて実験に取り組もうとしている。	何も工夫をせずに実験を行っている。

実験の事前指導又は実験中にアドバイスした内容

- ・顕微鏡の使い方
- ・マイクロメーターの使い方
- ・3種類の対物レンズを使用する順番
- ・ピントが合った状態で倍率を変化させること
- ・カメラ（タブレット）の操作方法

4 生徒の評価事例

ここでは、実験プリント（その1）の記述を分析することにより、評価を行う。

6. 今回の実験でよくできたこと、工夫したことを書きましょう

【評価Bの例】

記述欄に書かれた内容は、実験の事前指導又は実験中にアドバイスした内容なので、既習の知識を生かして実験に取り組んだことが考えられる。よって、評価B（「おおむね満足できる」状況）と判断できる。

プレパラートを動かしたり、ピントを調節したりした。

【評価Aの例】

①では、倍率を変えるときだけでなく、光量によってマイクロメーターの見え方が変わることにより気づき調節を行いながら観察した点に、実験が成功する（マイクロメーターの1目盛りの大きさを計算）ために自分なりに工夫をしたことが分かる。よって、評価A（「十分満足できる」状況）と判断できる。

①目盛りを合わせるときに光の量を調節しながら行った。

②では、接眼マイクロメーターと対物マイクロメーターが重なっている写真を撮る課題が達成できるように写真の撮り方について工夫をした記述がある。よって、こちらも評価A（「十分満足できる」状況）と判断できる。

②カメラで写真を撮るときは、手がぶれないように肘をつきながら撮影しました。きれいに取れました。

【評価Cの例】

抽象的な記述でどのように工夫をしたのか分からない。よって、評価C（「努力を要する」状況）と判断できる。

積極的に取り組めたとし、計算することができました。

【「努力を要する」状況と評価した生徒に対する指導の手だて】

実験の次の授業にて事後指導を全体に向けて行い、「努力を要する」状況と評価した生徒の様子を確認する。事後指導後に声をかけ、指導内容の理解の度合いを確認する。今後の実験時において重点的に観察し、支援を行う。